

白樂天の諷諭詩：日本文學に於ける白詩の影響についての一考察

目加田，誠

<https://doi.org/10.15017/2557022>

出版情報：文學研究. 23, pp.105-116, 1938-06-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：



白樂天の諷諭詩

日本文學に於ける白詩の影響についての一考察

目 加 田 誠

我平安朝の文學に、文選と共に白氏文集が多くの影響感化を與へたことに就いては今更云ふを俟たぬが、實に此時代白詩に對する愛好崇拜模倣は今日想像以上であつたらう。本朝麗藻に高積善の「夢中同謁白太保元相公」と題する詩がある。彼が少年の時、父が常に元白の故事を語り聞かせたと云ふから、憧憬のあまり遂に「容鬢宛然夢に入り來」つたものかどうか、兎に角、當時白樂天を夢に見たと云ふことは非常に得意な事であつたらしい。だから中書王や、藤爲時には共に「和高禮部再夢唐故白太保之作」がある。中書王の詩の注には「我朝詞人才子、

白氏文集を以て規摹と爲す。故に承和以來詩を言ふ者皆體裁を失せず」と云つてゐるし、爲時の詩には「風姿未下與影圖訛上」の句があり、我國の白樂天の風跡を慕ふ者は多く屏風にその姿を畫いたと注してゐる。この爲時の子たる紫式部は云ふ迄も無く、其他當時の人々の文學にいかにも白氏の影響が多かつたか、之に就いては最近金子彦二郎氏も國語と國文學（昭和十三年四月）に白氏文集と日本文學（主として平安朝の和歌との關係について）と題して詳しく例證してゐられる。私は最早こゝにそれを繰返さうとするのではない。只その影響の受け方といふ様な方面から少し考へ

て見度いと思ふ。

金子氏は平安朝に於ける白詩流行の原因を列擧され、その中に、白詩の背景を爲す社會生活と我平安朝のそれが酷似せしこと、又白樂天の地位身分と我平安朝文學者のそれが酷似せしことを擧げて居られる。此時代の唐の文學は多く文人的官僚の文學であつて、詩によつて優れた地位を得、又詩によつて罪を得て流された例も往々見受けると共に、官界の浮沈が詩の大きな背景になつてゐるので此時代の唐の詩は、作者の官途に於ける境遇浮沈を知らねば到底理解出來ぬもの計りと云つてもいい位だ。白樂天の文學も其の例を洩れぬ。彼の文學觀には確かに官途の浮沈による大きな轉機の存する事を知る。

貞元三年白樂天は十六歳で始めて長安に至り、やがて進士に及第して、貞元十八年、明經出身の元稹と共に秘書校書郎を授けられ、元和元年、元白共に制擧に應じ、白樂天は藍屋縣尉となり、二年翰林學士を授けられ、三

年制策考官、左拾遺に任ぜられるが、元和五年元稹失脚、六年白樂天の母卒して渭上に退居する迄、就中元和の初から五年迄が、白樂天の朝に在つて最も活躍した時間で、その後引續いて起る不幸と、やがて江州流貶を境として、彼の文學に對する態度が全く相違を見せて居る。

概して支那では、其身朝に在つて、政治に何らか參與し、又は參與しやうとしてゐる間は、歷朝爲政者の指導原理たる儒教の主張に基き、救世濟民の抱負を伸べやうとするが、一旦此の中心から脱し、又は離れさせられると、最早其位に非れば其事を云はずで、忽ち獨善主義に向ひ、自然を友とし、老佛に心を傾け、詩酒に放浪して氣樂な生活を享樂しやうとするのが一般である。白樂天はこの道を最も顯に行つた一人である。

我平安朝前期と支那唐代の社會は、一は奈良朝以來唐土の文化吸収に汲々たる時、一は西域文化の移入最も盛な時であるといへば、似通つた状態のやうであるが、其

間根本的な相違があることを思はねばならない。我國は奈良朝から平安初期にかけて、専ら唐土の文化を輸入し、それを醇化して、日本文化の水準を急速に引上げた。それは唐土の文化が當時我國の文化より確かに程度が高く、之を我々の祖先は憧憬し模倣しつつ、而も之を全く我國のものに化して、我文化を健全に發達させて行つたのである。然るに支那が當時西域の文化を移入するに當つては、事情が大いに異つてゐた。支那中國に近接する西域諸族の文化は、中國の文化より遙かに低く、それに比して漢人の文化は遙に完成されたものであつた。西域の間には長安の天子を天可汗として尊敬した。かういふ事情の下に移入される西域の文化なるものは、それは全く優位にあるものゝ享樂の爲めに、彼の異國趣味異國情調が喜ばれ、或は長安市の胡店胡姬となり、或は珍珠、或は音樂舞踊、すべて漢人の享樂に供せらる可く入つて來たものである。従つてやがてそこには廢頽が現

れ、墮落を來し、貞元々和の頃は愈々之が長安を風靡し、「今北胡京師と雜處し、妻を娶り子を生む。長安中の少年胡心あり。吾子首飾韓服の制を見よ。向と同じからず。物妖に非るを得んや。」（東城老父傳）と云ふ有様に立ち至つてゐたのである。加ふるに安氏の亂後、國力は未だ回復せず、對外對内多事、朝權いよく微弱、社會は貧富の懸隔甚しく（當時長安富人の極度の奢侈を證據立てる記録は多い）或ものはひたすら享樂を追ひ、或ものは訴ふるすべなき塗炭の生活に喘ぐといふ時である。貞元年間、早く古道復活を叫び出したのは韓退之であつた。彼の古文運動は只文章の上のみでなく、古道復興、支那傳統の儒教精神を高調する運動に理解す可きである。同じく貞元より永貞の頃、未だ志を得ぬ白居易が、元稹と共に、やがて制策に應ず可く、自ら試みた策林を見ると、その七十五條の中、儒教を本とし、佛教を排し、（曰、僧徒日益、佛寺日崇、一夫不_レ田、有_レ受_三其

餒、一婦不織、有受其寒、質朴勤儉、厚斂を誡めて民を富まし、淫靡なる音樂を抑へて中國の音樂を復興せん事を云ひ、又議「文章」の條には今の淫辭麗藻は反つて文を傷くるものとして質を尙び淫を抑へる事を主張してゐる。之は確かにかの韓愈の思想と相通するものである。この時憲宗即位し、憲宗はその初めは、中興の主とも云はれる君であつて、即位と共に王叔文一黨を放逐して、「剛明果斷、能く忠謀を用ひ、屢ば諫書を徴し、群議に惑はず」吳元濟を誅しては、唐の威令幾ど復た振ふと云はれた。此の政治刷新の氣運に應じ、古道復興、中國傳統の儒教精神に立ち返らうとする氣分が起つて來るのは當然であつた。此の時、白居易は選ばれて諫官の職に在り、かねての主張に基いて屢ば上書し、又志を詩に現した。こゝに於て所謂新樂府の製作となる。

この時代の白樂天の文學觀を知る可く、先づ集中、唐生に寄すの詩を擧げやう。

……我亦君之徒、鬱々何所爲、不能發聲哭、轉作樂府詩、篇々無空文、句々必盡規、功高虞人箴、痛甚騷人辭、非求宮律高、不務文字奇、惟歌生民病、願得天子知。

之は詩を諷諫の具とするといふ、かの詩三百篇を時政の美刺、上は以て諷し下は以て風化する手段として扱はふとした以來の儒教的文學觀に他ならぬ。又新樂府の序に曰く、「惣じて之を言へば、君の爲にし、臣の爲にし、民の爲にし、物の爲にし、事の爲にして作る。文の爲めにして作るにあらざる也」と。かの韓退之一派の古文家が、文を以て載道の器とする主張と、この白樂天が詩を以て純文藝として考へず諷諭の爲め換言すれば道の爲めに供しやうとした考は同じであつた。

「元九に與ふる書」は後に白樂天が江州に流されて直後、親友元稹に送つたものであるが、之によつて更に彼の新樂府時代の文學觀、文學製作の態度が明にされる。

即ち晋宋以來六朝の文學を論じては、謝康樂は多く山水に溺れ、陶淵明は偏に田園に放まゝなり、更に梁陳の間に至つては、たゞ風雪を嘲し花艸を弄するのみ、噫風雪花艸の物、三百篇中豈之を捨てんや、おもふに用ふる所の何如のみと。又續けて云ふ。「唐興つて二百年、其間只陳子昂感遇詩、鮑防感興の詩、その他には杜甫の詩のみ。而も杜詩中新安吏、石壕吏、潼關吏の如きものを求むれば三四十首に過ぎず、杜甫すら此の如し、況や逮ばざるものをや。僕嘗て詩道の崩壞を痛み、憤を發して寢食を忘れ、之を扶起せんと欲す。時に憲宗皇帝即位、屢ば諫書を求めらる。僕此日に當り、擢んでられて翰林に在り、身は是れ諫官、啓奏の外、人の病を救ひ、時の闕を補ふ可くして指言に難かるものは輒ち之を詠歌し、稍々上に聞え、上は以て宸聰を廣め、下は以て吾平生の志を復せんことを欲し」たのである。かくして此頃製作されたのがかの秦中吟、そして所謂新樂府諷諭の詩であつ

た。拾遺となつて以來、時にふれ感じたことの美刺興比に關するもの、又武德より元和に至る、事に因つて題を立て一々詩に詠じた。もとより諷諭の詩ならぬ詩も作られたことであつたが、白樂天が之こそ己が使命と打ち込んだのは諷諭の詩に他ならぬ。元九に與ふる書には自分の詩を、諷諭の詩の他、退公獨處、或移病間居、知足保和、吟翫情性者即ち閒適の詩、及び事物牽於外、情理動於内、隨感遇而形於歌詠者、即ち感傷の詩、その他雜律の詩に分つてゐる。彼も曾て貞元二十年の頃、恰度朝廷には王叔文の一黨が漸く勢力を現す頃、未だ志を得ぬ彼は渭上に居を卜し、時に閒適の詩に心を遣つた。又元和元年藍屋の尉となつた冬十二月、王質夫と共に仙遊寺に遊び、明皇貴妃の事に感じて長恨歌を作り、陳鴻は又同じく長恨歌傳を作つた。

「樂天因つて長恨歌を作る。意ふに但だその事に感ずるのみならず、亦尤物を懲し、亂階を空き將來に垂れ

しめんと欲する也」

と傳には記されてゐるが、自ら此詩を感傷の部に入れてゐる通り、この時未だ詩を以て上を諷し、時を濟ふ助けとせんとする意識に立ち上らず、間暇あるまゝに明皇貴妃の運命にロマンチックな感興を起して、この哀詩を作つたのである。今や衰微の中にある國勢に、かの開元の盛世を想ひ、而して其の崩壞を歎じ、その因つて來る端を思ひつゝも、長恨歌は白樂天の本來の傾向といふよりも、むしろ唐のこの頃、貞元元和以後の小説等に屢ば現れる、ひたむきに情の世界に徹せんとして、そこに悲しい美を感じる、當時の文藝の求めたものの一つが現れてゐるものであつた。

先に云ふ白樂天の、詩を以て政道を補はんとする意識は、元和二年翰林學士に授せられた時から明になる。通鑑憲宗紀には

元和二年白居易樂府及び詩百餘篇を作りて時事を規

諷し、禁中に流聞す。上見て之を悦び、召して翰林に入れ、學士と爲す。

と云ふけれども、唐衢を傷む詩には

憶昨元和初、忝備諫官位、是時兵革後、生民正憔悴、但傷民病痛、不識時忌諱、遂作秦中吟……

と云つてゐるし、新樂府の序には、元和四年、左拾遺たりし時の作となつてゐるところよりしても彼が所謂諷諭の詩を盛に作つたのは、翰林に入り、左拾遺となり、諫官の位に在る己の使命を自覺して、此に於て大いに詩を以て治道に資せんと志したものと思はれる。

秦中吟に詠する所、或は貧家の女の嫁するに難きを(議婚)或は人民を苦しめる重賦を(重賦)、或は當時長安富豪の奢侈を(傷宅、歌舞、買花)或は官途の行き詰りを(不致仕)題材とした。

先にも云ふ如く、詩を以て諷諭の具とする風な考は決して白樂天獨特なものでは無い。この時に於ても、元氏

長慶集によれば、初め李公垂（紳）が樂府新題二十首を作つたが、所謂不虛爲字のもので、その中時弊を云つて尤も急なものの十二に和して、元稹が新題樂府を作つた。

白樂天は同じく此の題目により、更に之を増して五十篇とし、「篇々定句なく、句に定字なく、首句にその目を標し、卒章にその志を顯し、其の辭質にして徑、其言直にして切、其事覈にして實、其體順にして肆、見るものをして論り易く、聞く者を深く誠めん」としたのである。（新樂府序）その五十首に詠ずる所、或は王業の艱難をのべ（七德舞、百鍊鏡、一二王後）、雅樂の衰微を歎じ（立部伎、華原磬）、胡樂の古曲を犯すを難じ（法曲歌）、胡風を排し（時世粧、胡旋女）、邊功を戒め、徒に異國の娛樂を喜ぶを警め（新豐折臂翁、城鹽州、驃國樂、西涼伎）、奢侈を憂へ（牡丹芳、紅線毯、綠綾、鹽商婦）、佛寺の寢く多きを刺り（兩朱閣、服食^藥の無意味を誨へ（海漫漫）、人生の艱難（太行路）、民生の辛苦

（捕蝗、縛戎人、秦吉了、杜陵叟、賣炭翁）を云つて、時弊を刺り、世を戒めやうとしたのであつた。

之ら諷諭の詩を杜甫の流れを汲むものと見ることは出来る。大體李杜の詩を考へる場合、李白の詩は天寶の亂以前の唐代文藝の最後の、比ふ可きものもない光彩であつたが、杜甫の詩は種々の意味で天寶の亂後の詩のゆく道を開いた。亂後李白の流れを汲む詩人としては願況の如きが稍之に近いと思はれるが、已に世運傾き、政治の惡弊いよく現れ、民生慘苦に泣く時、この諷諭詩の作者達が、先達として仰ぐのは杜甫であつた。元稹の如きは、詩人あつて以來、未だ子美の如くなるものあらずと崇拜した。かく考へると、元白の諷諭の詩は直ちに杜甫の歩んだ道の如く思れるけれども、そこには一つの大きな相違を認めねばなるまい。杜甫は騎驢三十載悲痛なる自らの體驗を通して、支那人民の痛ましい運命を訴へた。白樂天の詩はその身は朝に連り、己が使命として政

を補ふ意に於て、民の慘苦、社會の不平を察して、之を上に聞えしめんとして作られたものである。

故に白樂天は、一旦江州に放逐されて後、出でゝ疲弊せる地方民に接すれば、いよゝその詩は深刻となる可きであるのに、實は一度び其の位を去つては最早その事を云はず、再び民生の艱難を上聞えんとするでも無く、明哲保身、その後自ら願ふて杭州の刺史となり、又蘇州に刺史となり、地方官の生活が都に比して安易であるまゝに、それこそ詩歌琴酒、妓樂を侍らし月花を賞し遂に民衆の生活に觸れて行かうとはしなかつた。

彼が晩年次第に佛教に歸依して行つたのは人も知る通りである。初め佛寺の多いのを刺つた彼も、やがて救ひを佛に求めたのは、全く身邊の不幸落莫に萌したものである。元和五年親友元稹の江陵に左遷されたことは、白居易にとつて大きな打撃であつた。その年最愛の女兒金變が死に、翌六年四月には母が死んで彼は渭上に

退居した。

一一二 (二六一二)

朝哭ニ心所レ愛、莫哭ニ心所レ親、親愛零落盡、安用身獨存、幾許平生歡、無限骨肉恩、結爲腹間痛、聚作鼻頭辛、悲來四肢緩、泣盡雙眸昏、所以年四十、心如七十人、我聞浮圖教、中有解脫門、置心爲止水、視身如浮雲、抖擻垢穢衣、度脫生死輪、胡爲戀此苦、不レ去猶逡巡、回念發弘願、願此見在身、但受過去報、不レ結將來因、誓以智慧水、永洗煩惱塵、不レ將恩愛子、更種悲憂根上

之はこの時の詩である。最愛の肉親に引つゞいて死別し、親友は遠く江陵に流され、加ふるに白居易はこの時重い眼疾に悩んでゐた。四十早くも老を感じたのである。衰病四十身、親朋書信斷の句もこの時の詩に見える。或は老色頭髮白、病形肢體虛、或は四十已如此、七十復何如(沐浴)といひ、時に借問空門子、何法易修行、使我忘得心、不レ教煩惱生と迷ふ彼が、やがてかの

東洋的なる諦觀に達する峠であつた。

この渭上退居の數年が白樂天に與へた變化は大きかつた。元和九年入朝、左贊善太夫に任ぜられる。十年春には元稹が一度詔を受けて京に入つたが、忽ち三月連州に貶せられた。この年は正月吳元濟の反があり、又元年以來各地方の司馬になつて流謫の生活を送つてゐた王叔文の黨派の人々、柳宗元、劉禹錫その他が、春一度び京に歸され、忽ちにして又遠い地方の刺史に出された。六月には宰相武元衡が暗殺され、裴度も傷を負ふ等々事件多く不安の年であつた。この宰相暗殺犯人の逮捕について白樂天のなした献言から、遂に彼は罪を得て、この年（十年）秋江州司馬に貶せるゝ事となる。或は新井の詩に禍されて、司馬に貶せられたとも傳へられるが、いづれ當路の風がこの時已に白居易に冷く當つて來てゐたのである。

先に引いた與三元九書は十年十二月即ち江州に至つた

直後書かれたものと推定する。時に未だその心持に清算超越し切れぬものがあり。我來し方をふり顧つて、之まで持し來つた誇りと今後風花雪月にかくれやうとする氣持とが錯雜してゐる。

この文中に、從來如何に諷諭の詩に力をそゝぎ來つたか、而も之によつて得たものは徒に當路の怒を買ひ、人の謗を招いたばかりであつた。己れの詩に於て、世人の愛する所は悉く操律と長恨歌に過ぎず、時の重んずる所は、僕の輕んずる所なりと云つてゐる。之は又當然のことでもあつて、當時長恨歌を誦し得る故を以て價を増させた妓女もあり、江西に抵る三四千里到る所白詩を題するものありといひ、その流行は彼自ら與元九書に記してゐる通りであつたらう。けれども「此誠に雕蟲の戲、多と爲すに足らず、然も今俗の重んずる所は正に此に在る耳」と慨歎した。然し乍ら、

古人云ふ窮すれば則ち獨り其身を善くし、達すれば

則ち天下を兼濟すと。僕不肖なりと雖も、常に此語を師とす。

といふ彼は、最早再びかゝる諷諭の詩を作らうとせず、之より全く獨善の心境に入る。

元和十一年秋、長恨歌と共に有名な琵琶行が作られる。いはゞ十年の間を置いて、再び元に歸つたやうなものである。たゞかの長恨歌は國家の治亂を背景に、明皇貴妃の情事を華やかに歌つたが、之は十年を距て、我身の轉變に感じて、淪落の女を歌つた。已に初め江州に到る途中、鄂州に夜泊して、隣船に歌聲をきく、歌罷んで泣いて咽ぶ。聲を尋ねてその人を見れば婢娉十七八、帆船に倚つて佇む婦あり、之を問へども眉を低れて終に答へなかつた。

夜聞歌者

夜泊鵬鵠洲、秋江月澄徹、隣船有歌者、發調堪愁絕、歌罷繼以泣、泣聲通復咽、尋聲見其人、有

婦顔如雪、獨倚帆檣立、婢娉十七八、夜淚如眞珠、雙雙墮明月、借問誰家婦、歌泣何凄切、一問一沾襟、低眉終不說。

時しも都を離れて貶地に向ふ路すがら、此一夜の印象は永く白居易の心に忘れ得ぬものであつた。私はかの琵琶行の詩が、序によれば翌元和十一年秋客を湓浦口に送つた夜のことの如く記されてゐるが、船中琵琶を彈ずるものをきいて、聲を尋ねて喚び出して女の薄命なる物語を聞き、我身に覺えて共に落魄を歎ずると云ふ構想は、實は事實でなく、かの鄂州の一夜の思ひ出をもととして作られたものに相違ないと思ふ。

唐のこの時代の小説の流行を考へ、まして白居易の弟行簡は李娃傳を作つたとも云はれる(疑問はあれど)ことを思へば、白居易が潯陽の謫居の佗しさを、かの鄂州の夜の印象をもととしてかゝる一場の物語りに託して歌つたと考へられる様な氣がする。

當時朝にあつては權勢に媚びず、自己の主張を通さうとした人々が、そのため一旦流されると、忽ち之までの誇をすてゝ、都に戀々たる情を訴へるのは一般の傾向で、江州に流された白居易の心持も亦例外ではなかつたが、之より彼は所謂月雪花を友とし、琴酒に耽り、情を

詩に放ち、そして次第に佛道に心を深めて行つた（この後の事は却つてよく知られてゐる所である）。朝廷の方針も元和初年の氣運はやがて崩れて、只榮達を希ふ人々の黨争に終始するに至つた。元稹が再び都に召し還されて後、ひたすら名利の場に狂奔したのに反し、白居易は却つて地方官の無事安易を願つて、杭州に刺史となり、更に又蘇州の刺史に出た。後徵されて刑部侍郎に除せられるが、朝廷の黨争を避けて太師賓客の閑職を以て東都に分司し、香山の僧と交り、自ら香山居士と稱し、安心を佛道に托して、而もその信仰は苦行者の途でなく、老年に至る迄、或は歌妓を侍らし、或は家僮に命じて霓裳

羽衣を合奏させ、世の流轉の姿をあるがまゝに觀じて、心豊かに天を楽しみ、生を享樂した。「今生世俗文字の業、狂言綺語の過を以て、將來世々讚佛乘の因、轉法輪の縁となさん」とは云つても、最早狂言綺語救世に益なきを憾みはしなかつたのである。

かくの如く白樂天の文學は、一生の中にかゝる轉機をもつ。「太行の路」にも比す可き世路の艱難をも經て、かの晩年の境地に至つた彼であらう。彼が或時期に、非常なる抱負をもつて試みた諷諭の詩、新樂府は、彼の一生の中の大きな仕事であり、文學史的に亦大きな足跡であつた。この中年期の活動を見逃して白樂天を思ふことは實は遺憾である。然し乍ら所謂世の重んずる所僕の輕んずる所で、已に宣宗の賜はりたる輓詩にも、童子解吟長恨歌、胡兒能唱琵琶篇とあるが如く、當時に於て、白樂天が一種の民衆詩人として世間にもてはやされたのは實に之らの詩の爲めであつた。

支那の文學を大別して載道文學、即ち道の爲めの文學と、言志文學、即ちいはゞ藝術本位の文學とに分ける見方がある。文選の文學は藝術を道德から超越させたものが主流であり、白氏の時代は漸く實功主義、載道主義の文學に向つた時である。之は決して韓退之の文章のみでなく、この時代の傾向であつた。我奈良朝平安朝の文學は始め文選の影響を受けた。否文選によつて文學といふものを知つたと云つても過言では無いだらう。それが白氏の文學に接し、それ程の流行を見たが、これは如何なる點によるのであるか。我國に於ては杜甫の詩の流行は却つてずつと後れて五山時代になる。杜甫の悲痛な體驗と、強靱な意志に基く悲壯な詩境は、平安朝に於ては理解されなかつたと同じく、白氏のこの諷諭の詩の精神も結局受入れられなかつたのである。而して平安朝の人々に

愛されたのは、實に白氏の詩の隨處に發揮される優美なる詩想であり、巧みなる表現であつた。大陸の自然風物、支那の生活の我國とは全く異つたものも、我國のそれを以て自由に之に當てゝ理解し、詩趣を體得し、それによつて我國の風雅の發見の助けとなつた。初め文選に養はれて、支那の美辭麗句に眩惑されたものが、更に平易にして流麗なる白樂天の詩句にいよ／＼隨喜した。平安朝の貴族達は、支那の詩にこもる深い國民の體驗を理解するよりも、只そこに現れるあはれの句を此上なく愛し、白氏の悠々たる無常觀も、感傷の甘さに喜んだ。白氏のこの時代の憂國の詩も、その中の巧緻なる句法、表現をこそまなび取つた。かうして平安朝の人々は白詩によつて己れの情操を富まし、風雅を發見し、その表現を學んだのである。